

オンライン学習者のためのオンライン・オリエンテーション - ストーリー型カリキュラムに向けての改善 -

Online Orientation for Online Learners -Revision to Story Centered Curriculum-

根本 淳子[†] 宮崎 誠[†] 松葉 龍一[†] 鈴木 克明[†]
Junko NEMOTO[†] Makoto MIYAZAKI[†] Ryuichi MATSUBA[†] Katsuaki SUZUKI[†]
† 熊本大学大学院

† Graduate School of Social and Cultural Science, Kumamoto University
Email: nemoto@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：本発表では、熊本大学大学院教授システム学専攻で新しく導入したストーリー型カリキュラム実現のためのオリエンテーション科目改善について報告する。

キーワード：オリエンテーション, eラーニング, ストーリー型カリキュラム

1. はじめに

1.1 オンライン・オリエンテーションの実施歴

熊本大学大学院教授システム学専攻では、eラーニングによりすべての履修科目が提供されている。2006年の修士課程（2008年度からは博士前期課程）開講時から、入学予定者を対象に、入学前（履修開始前）にオンライン・オリエンテーションを毎年度実施してきた。入学前の遠隔学習に対する不安の緩和や、技術的なトラブルによる学習弊害を学習開始前に取り除き、学習者間のコミュニティ形成や遠隔学習でのマナーを身に付ける重要な機会として設けている⁽¹⁾。正規科目ではないが、本専攻ではこのオンライン・オリエンテーションを「オリエンテーション科目」と名付け、学習者にとって実質上の前提科目として提供してきた。

1.2 ストーリー型カリキュラムにおけるオリエンテーション科目の位置づけ

2008年度より、大学院教育改革支援プログラムの一環として、ストーリー型カリキュラム（Story Centered Curriculum: SCC）を導入した。SCCは複数の通常科目を組み合わせて、学習者にとって実践的なひとつのストーリー上で各科目の課題を展開させていく⁽²⁾。2008年度前期は必須科目の5科目を組み合わせてSCCとして提供している。よってSCC上で学習者が一度に取り組むタスクは、科目群の中のいずれかひとつにであるため学習者は指定されたタスクに集中し、理解を深めやすくなることが期待できる。

一方で、従来型のカリキュラムに慣れ親しんだ学習者には、SCCで学ぶことの利点と同時に不安や不便が伴う。ひとつのストーリーに沿って学習することの意味や、心構え、学習スケジュールの確認、さらに個々の学習アプローチや学習時間の確保の検討などが履修前にできていることが彼らに要求される。そこで、不安を緩和し、SCCによる学びに対する動機付けの場として、オリエンテーション科目を活用した。

2. オリエンテーション科目の改善

2.1 科目改善プロセスとスケジュール

科目改訂を担当した4名は、SCC開発にも参画しており、オリエンテーション科目の改訂はSCC開発の一部としてみなされた。オリエンテーション科目は入学前に提供されるため、できるだけ簡潔にすることがこれまでのポリシーのひとつであったが、学習者がSCCでの学習に集中できる環境を作ることが本年度は最優先にすることとした。

分析から開発までに与えられた時間は、約2ヶ月間であった。SCC開発（カリキュラム）と合わせた科目分析、科目設計、そして科目開発時間の比率はおよそ4:3:3である。開発やコンテンツ動作チェックに十分なゆとりを持ったスケジュールが組めない代わりに、開発とレビューを並行に行えるための製作人員とスケジュールの確保を行った。

2.2 オリエンテーション科目の改善点

既存カリキュラムからSCCに移行するにおいて大きく3つのレベルでの改善が必要であることがわかった。ひとつは、SCCに対する学習者へのメンタル的な配慮である。SCCについての説明とともに前期のスケジュールと全貌をイメージできる情報を提供した。不安な点は学生間で共有させ、それに対してひとつずつ専攻から回答することにした。

2点目は、SCCでの学習活動の負荷軽減である。SCCでは5科目分の内容をまとめて実施するが、毎週ストーリーに併せた課題が提示される。よって実際の学習量は既存カリキュラムと同じでも、この点に関しては課題が振ってくる印象、つまり負荷が高い印象を与える。そこで知識を補完するために用意されている自由科目は入学前にアクセスし、事前に学べる環境があることをオリエンテーション科目で周知した。

最後は、SCCの効果を集積できる環境の確認である。本年度から取り入れた学習ポートフォリオに学習成果を集積できるよう、技術的にも内容的にも支

援する第一段階になるようにした。

この3つのレベルの改善点は、既存のオリエンテーション科目に挿入された。改定した本科目の構成は図1の通りである。

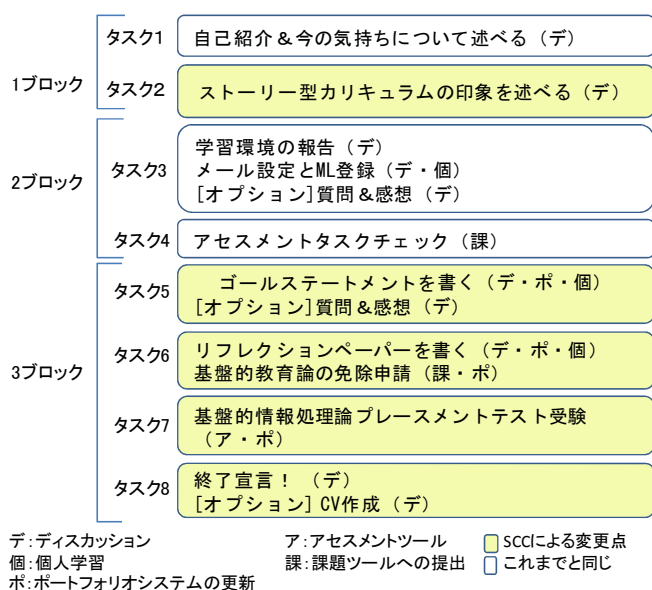


図1 オリエンテーション科目の構成

3. オンラインオリエンテーションの実施

3.1 科目の構成

科目は3ブロックで構成され、計8つのタスクが埋め込まれた(図1)。ブロックごとに内容が独立しているため、シーケンスの制御は特に行わなかった。基本的には、1ブロックから順に学習を進めることを想定とした。トピックごとにタスクを設定し、ディスカッションやアセスメントツールなどの利用法を学びながら新学期への準備が完了できるよう、能動的な活動が行えるようにした。

3.2 実施概要と結果

科目公開期間は2008年3月1日から4月7日(計38日間)で、入学予定者であった19名を対象とした。公開最終日の設定以外は、タスクの締切りなどは一切設定しなかった。

学習教材への閲覧状況をシステムログ(WebCT)から解析した。参加者全員が学習活動(タスク)に関するサイトを閲覧した合計時間は、全体の85.5%にあたり(教材閲覧は15.2%)積極的な学習活動が展開されたことが確認できる。閲覧したサイトをタスクごとに分別し、閲覧合計時間を比較すると、タスク1が閲覧されている時間は73時間10分21秒と全体(296時間27分18秒)の24.68%にあたり、もっとも長いことが分かった。詳細データには、他のタスクよりもタスク1への訪問数が多いことが顕著に現れた。本科目は、学習者が本専攻で初めて体験するオンラインコミュニケーションの場であり、

その多くにとって初のeラーニング学習であった。環境に適応するための時間が費やされたと想定できる。

次に閲覧時間が長かったのは全体の24.31%に相当したタスク6であった(72時間03分40秒)。タスク6を含む3ブロックには、4つのタスクが用意されていたが、ゴールステートメントや履修計画といった、学習者がこれからの学びについて熟慮し、さらにポートフォリオの操作を学びながら更新を行うため受講者がもっとも時間を費やしている部分であった。3ブロックの閲覧時間は全体の52.2%を占めた。ログ解析対象のWebCT上での活動の他に3ブロック内には投稿するレポートをまとめたり、ポートフォリオシステムの操作が含まれる。よって、データとして取れた時間よりもさらに長時間にわたって学習が行われたと推測できる。

ディスカッション機能を用いた活動を10箇所用意した(タスクレベルは5箇所)。ディスカッションのメッセージ投稿数平均は42.3件(SD=46.29)であり、そのうちリフレクションペーパーの投稿と相互コメント(タスク6-1)は180件の投稿があった。掲示板への書き込みを見ると、SCCに対する反応には期待感と心配が錯綜している様子が見取れた⁽²⁾。

学習者全員がすべてのタスクを期間内に終了した。学習者の約9割が自分の課題の提出が完了した以降もコンテンツにアクセスした履歴があった。つまり、他の受講者の投稿を確認したり、自分の提出した課題の見直しをしていたと予想できる。

4. 今後の課題

来年度は、SCCの実施が2年目であり、比較的余裕をもって科目の準備ができると予想している。科目準備が整わなかったため本年度は不可能であったが、学習時間をあと2週間ほど延長することが実質上可能である。時間的余裕から入学者の心のゆとりを作る努力をする。

本年度前期SCCの評価の一部として、オリエンテーション科目の役割と効果について確認する必要がある。具体的には、実施予定のフォーカスインタビューの中でオリエンテーションの体験について確認する。また、「次年度以降のSCCで学ぶ後輩にどのようなメッセージを伝えたいか」を問うことで、オリエンテーション科目を学生の視点から分析する。

参考文献

- (1) 根本淳子・北村士朗・鈴木克明：“「eラーニング専門家養成のためのeラーニング環境の設計:熊本大学大学院教授システム学専攻の導入教育事例」”,教育システム情報学会研究報告21(1),pp.33-40(2006)
- (2) 鈴木克明・根本淳子・松葉龍一・宮崎誠・柴田喜幸：“eラーニングによるeラーニング専門家養成大学院へのストーリー型カリキュラム導入”,教育システム情報学会第1回研究会,pp.65-68(2008)